



# 1年次から、学校現場での実習で 教育の「今」を見て、感じて、学ぶ

岐阜<sup>しょうとく</sup>聖徳学園大学 教育学部

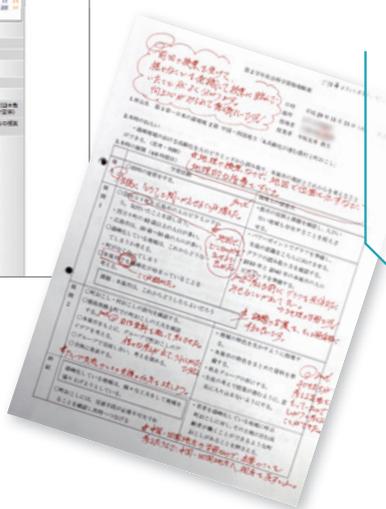
## いろいろな先生の授業を参観して、 指導上の技や工夫を学んでいます

教育実習までに、様々なタイプの先生の授業を参観します。発問の仕方、子どもに声をかけるタイミングなど、どれも勉強になります。(白井さん)



## 体験後は、気づきや学びを 必ず文章にまとめています

文章を書く過程で改めて気づくこともあります。気づきや学びはゼミのブログ(\*)にアップしており、周りからの反応が励みになっています。(岩田さん)



## 2年次での指導案作りが 教育実習に役立ちました

2年次に指導案の作り方を学んだことで、3年次の教育実習では、自分なりの軸を持って授業ができました。(寺坂さん)



学校教育課程  
社会専修3年  
**岩田有加**

いわた・ゆか  
愛知県立津島高校卒業。  
中学校教員志望。



学校教育課程  
国語専修3年  
**白井杏実**

しらい・あみ  
愛知県立江南高校卒業。  
小学校教員志望。



学校教育課程  
社会専修3年  
**寺坂友希**

てらさか・ともき  
愛知県立豊橋南高校卒業。  
小学校教員志望。

## 1年生で体験 教員の仕事全般を

岐阜聖徳学園大学教育学部の「クリスタルプラン」では、教員としての実践的な指導力を育むため、4年間を通じて学校現場での実習を行っている。「教員は、就職1年目から授業を行い、担任を受け持つこともあります。大学1年生から小・中学校を訪れて授業を見て、子どもと触れ合いながら授業づくりや学級経営などについて学べたのは、大きな経験でした」と、寺坂友希さんは語る。

1年次に行われるのは、「学校ふれあい体験」だ。5・6・9月の各1日、同じ小学校の同じクラスに入り、授業を参観して、担任と同じように子

\* ブログは右記参照。 <http://www.10.schoolweb.ne.jp/swas/index.php?id=2190001&frame=weblog>

\*プロフィールは2017年3月時点のものです

どもと一緒に休み時間を過ごし、給食を食べ、掃除をする。この体験で、自身が受けてきた授業とは異なる指導法があることを知る学生もいる。白井杏実さんもその1人だ。

「授業には様々なやり方があり、自分が受けてきた型にとらわれず、よりよい授業をつくっていくことが大切なのだと感じました」

放課後には、遊具のペンキ塗りやプール掃除といった校務も任せられる。授業だけではない、教員の仕事全般への理解を深めるためだ。

「子どもと1日中触れ合い、教員という仕事の内容を知って、教職に就くことを考え直す人もいました」と岩田有加さんが言うように、1年次での学校実習は進路を再確認する場にもなっている。

## 指導案と照らし合わせながら 授業を参観

2年次後期には、小・中学校計3校を訪れて「教育実践観察」が行われる。これは、提示された指導案で授業の目標や進め方を把握した上で授業を参観し、発問の仕方、子どもとのかかわり方など、授業づくりを学ぶ実習だ。3校目は研究校の発表

日に訪問し、学生は事後研究会にも参加する。ここで学んだことは、3年次の教育実習（小・中ともに各4週間）に生きたと、寺坂さんは語る。

「私は教えたいという気持ちが強くと、知識をたくさん詰め込む指導案を作っていました。実際の指導案と授業を見て、量よりも、1本筋が通った授業であることが大切なのだと分かりました。教育実習では、子どもが『もっと知りたい』と思えるような授業づくりを心がけたところ、授業が活発になり、大きな手応えを得られました」

1・2年次のどの実習も、事前に授業を見る観点や、子どもと触れ合う際の留意点などを学んで実習に臨む。実習後は、参加者全員で1日を振り返り、課題を話し合うとともに、学びや気づきをレポートにまとめて提出する。学生は、この「事前学習→実習→振り返り」のサイクルを実習ごとに繰り返す中で、教員としての知識・技能を身につけ、よりよい指導のあり方を考えていく。そして、教育実習には、寺坂さんのように、自分なりの指導観や明確な目標を持って臨むことができている学生も少なくないという。

## 教員や子ども、学校が 抱える課題も実感

3・4年次のゼミでの学びも実践的だ。元中学校校長という玉置崇教授のゼミでは、小・中学校の教員研修などにも積極的に参加する。白井さんは、教員が生徒役になる模擬授業に参加した際、「授業をよりよくするために、先生たちも学び続けているのだと感銘を受けました。私もそういう教員になりたいと思いました」と語る。

学部の選択科目には、小・中学校の授業や行事の支援などに学生を派遣する「学校インターンシップ」や、学生が企画・運営し、小学生に体験学習を提供する「フレンドシップ」などの活動もあり、4年間を通して現場が学びのフィールドとなる。

多くの学校を訪れることで、現場の課題を肌で感じ、目指す教員像が明確になったと、岩田さんは語る。

「2年次に訪れた学校では、授業観察を通して、学級経営の大切さを実感しました。子どもをしつかり見つめ、子ども自身が成長できるきっかけを見いだせるような指導のできる教員になりたいと思います」

## 大学の思い

### 生きた現場の体験が 学生の指導観を育む



教育学部 教授  
玉置 崇  
たまおき・たかし

実際の授業や学級経営は、大学で学んだように進むものではありません。様々な学校を訪れ、先生や子どもとかわりながら学んでほしいと考え、1学年約330人に対し、岐阜市を中心に約250の小・中学校と連携し、1年次から学生全員が実習できる体制を整えました。私を含め小・中学校に勤めていた経験を授業で話す教員はいませんが、「百聞は一見にしかず」です。また、教員は自分が受けてきた授業を手本として授業をしがちです。早い段階から多様な授業を見ることで、意識の転換を図ってほしいという思いもあります。実習先に私たちも同行し、教室での学生の様子を見て、その場で声をかけています。学校現場を教材として、学生は学んでいるのです。

実習先の学校の状況は様々です。生徒指導が大変な学校もありますし、指導担当の先生と考えが合わないこともあります。ただ、実社会で働けば、そうした場面に出合うこともあります。地域の多様な学校と連携することで、1年次から様々な学校で経験が積めることも、本学ならではの思いです。